「千都の杜」は「兵どもが夢の跡」

副会長・藤井正樹

2. 法基城と沢山城

「千都の杜」の開発に先立つ平成９年に発掘調査され能ヶ谷東部遺跡では、縄文時代や古墳時代のほかに近世・近代の遺構・遺物も若干出土したが、中世の出土物が皆無だったのは意外である。というのは「千都の杜」が拓かれた域内には中世にホウキ城と呼ばれた山城が築かれたとする伝承があるからだが、城郭の遺構が検出されなかったのは、発掘面積が総開発面積の僅か１%強に過ぎないため、調査地点が城郭遺構から外れたのであろうか。

ホウキ城のホウキは文字としては伝わっていないが、まさか箒ではあるまい。中世に当地を支配した豪族小山田氏の一族に永正（１５０４～２０）頃の人として小山田伯耆なる地侍がいることから、この人が築城もしくは居城して伯耆城と称したとも考えられるが、能ヶ谷の旧字16号（現5丁目の西部から6丁目の東部にかかる一帯）の一角に法基畑の字名があったことから、この字名を採って法基城と称したのではあるまいか。本稿では仮に法基城と記しておくが、これが正しければ法基畑の辺りが城の主郭だったのだろう。なお、能ヶ谷６丁目21辺りを剣術畑と呼んだと伝えているのは練兵場の跡地、能ヶ谷の旧字10号（現2丁目の北部）の一角に的場と云う字名があったのは弓の練習場の跡地と思われ、ともに城兵を調練するための軍事施設だったのだろう。

「千都の杜」から鶴川駅に出るには急峻な五郎坂を下るのが最短だが、かつてこの坂で法基城をめぐる攻防戦があったと伝えている。坂に戦死者がゴロゴロと転がり、ゴロゴロのゴロが転じて五郎坂と呼ぶようになったと云い、坂の降り口の右側（五郎坂公園の反対側）にある円墳状の茂みは戦死者を葬った塚で、かつては五郎塚と呼ばれたと云う。また、五郎坂を下ると真光寺川に新矢崎橋、その傍らに矢崎橋が架かるが、五郎坂の戦いで城兵の射た矢の飛来先が矢先と呼ばれ、これが矢崎（やさき）に転じたと云う。なお、義経四天王の1人で文治5年（１１８９）に義経とともに奥州平泉で戦死した亀井六郎重清（もと紀州熊野の豪族）が亀井（麻生区上麻生）に築いた城の的場から射た矢の飛来先とする説や、後記の沢山城（三輪）から射た矢の飛来先とする説もあるが、それぞれ1・5、1キロメートルに近い距離があり、どんな強弓の者でもそんなに遠くまで矢を射ることなどできまい。

さて、文芸評論家の河上徹太郎は都内で戦災を被って盟友白洲次郎の「武相荘」に2年間寄寓した後、当地の風光に魅かれて隣村柿生（麻生区白鳥）に終の栖を卜したが、白洲正子が「多摩川を渡った所に丘というにはあまりに高く、山と呼ぶには低すぎる、いわゆる都築の丘陵と昔から言いならわされて居る万葉時代からうねうねつづく横山の、その一つを中にはさんで、河上さんと私たちの家がある。歩いて約二十分」（「三田文学」昭和23年6月号所載の「一つの存在」）と書いた「横山の一つ」が「千都の杜」の拓かれた丘陵である。

生涯猟人として当地を渉猟して地勢を熟知した河上氏が『エピキュールの丘』（昭和31年刊）所載の「都築ヶ岡の風物」に「このあたりは、城跡といふには余り小さ過ぎるが、トーチカ風の砦を築いたのではないかと思はれる台地が、丘の高みによくある。さうだとしたら小田原の北条氏が東からの敵に備へて造つたものではないだらうか？」と記している。法基城も砦クラスの小規模な軍事基地だったのかもしれないが、二ノ倉（能ヶ谷５丁目28・30辺り）の字名が近郷から徴収した米穀を貯蔵し兵糧米を備蓄するための米蔵を意味するとすれば、法基畑の西の剣術畑から同じく東の二ノ倉までの８００メートルにわたる広範な城域を占めた本格的な山城だった可能性がある。

さて、「千都の杜」の高みから南を望むと小田急線の向こうは三輪の七面山（沢山）である。その頂きには後北条時代（15世紀末～16世紀末）に小田原城の出城として沢山城が築かれており、城址からは大量の焼米が出土していることから、あるいは二ノ倉は沢山城の米蔵（例えば一ノ倉）に相対する呼称とも考えられる。そうであれば沢山・法基両城は本支の関係にあって一体的に経営されたことになるが、三輪に倉や蔵の付く字名は伝わっておらず、能ヶ谷にも二ノ倉以外に倉や蔵の付く字名は伝わっていない。なお、能ヶ谷に的場の字名があったことは前記のとおりだが、乗馬の練習場を意味する馬場の字名はなく、逆に三輪の字名に馬場（旧字22号、鶴見川に架かる精進場橋と高蔵寺の間の一角）はあるが的場はないことから、弓馬の練習場は両城が共同利用してともに武技を練ったとも考えられよう。

伝存する「北条氏照（八王子城主）印判状」（２月26日付、年不詳）に、郷中の馬をすべて集めて三輪の城米を江之　□　（１字欠）に届けるよう厳命したものがあり、郷中は広袴、三輪は沢山城、江之　□は江ノ島、発状時期は天正（１５７３～９１）頃と考証されている。後北条氏が天正18年（１５９０）７月に豊臣秀吉の小田原征伐により滅亡する直前、小田原籠城のため沢山城の城米を江ノ島経由で小田原に搬送したのだとすれば、小田原城の陥落とともに沢山・法基両城も落城もしくは開城して廃城となったのであろう。沢山城址は4つの曲輪（郭＝近世の丸）や腰曲輪（主曲輪の周囲に配置した小曲輪）、土塁、空濠など往時の遺構をよく伝えていることから、開発のため城址の旧態を喪った法基城の在りし日の佇まいを沢山城址に偲んでもよいのかもしれぬ。宮入芳雄（写真）・桑原紀子（文）共著『ホッとする風景がここにはある―東京都町田市能ヶ谷』（平成７年刊）は開発を前に「能ヶ谷の森」の保全を訴える立場で刊行された写真集であり、雑木林の中に谷戸や畑・休耕田・果樹園が散在する里山の原風景を掲載写真40葉に記録しているが、私にはその起伏に富んだ地勢が沢山城址に劣らぬ天然の要害のように見えるのである。（続く）

（五郎坂の戦いにおける戦死者を葬った五郎塚）